第７回 11/14 「ライブイベントプロデュース論 ～『亀の恩返し』ができるまで～」

亀田 誠治（かめだ・せいじ）先生　　有限会社誠屋 音楽プロデューサー

1964 年、アメリカ･ニューヨーク生まれ。
1989 年、アレンジャープロデューサー、ベースプレイヤーとして活動を始める。椎名林檎、平井堅、スピッツをはじめ、アンジェラ･アキ、ＪＵＪＵ、チャットモンチー、NICO Touches the Walls などのプロデュース、アレンジを手掛けている。
2004 年、椎名林檎らと東京事変を結成。
2009 年、自身初の主催イベント「亀の恩返し」を武道館にて開催した。

「誠屋」公式ＨＰ　http://www.ganso.makotoya.com/
「亀の恩返し」公式ＨＰ　http://eplus.jp/sys/web/s/kameon/index.html
公式ブログ　http://www.ganso-makotoya.com/blog/

《講義概要》

音楽プロデューサーとして数多くのアーティストをプロデュースしている有限会社誠屋の亀田誠治氏が、自身がプロデュースしたライブイベント「亀の恩返し」に関する講義を行った。

講義は「亀の恩返し」の実際の映像で始まった。その後、プロデュースの過程を年表で示し、ビジネスとクリエイティブの視点から詳しく説明。その中で、ライブプロデュースに対する思いや考え方、ものを創ることと売ることの位置づけについても示しながら、出演者をはじめとするメンバー集めに「音楽力」と「人間力」を重視したことや、ステージデザイン・幕間映像・パンフレットなどの様々な要素に強いこだわりを持っていたことを具体的に話した。また、実際に起こった問題についても触れながら、「長い時間をかけて一つのものを準備すると、その中で困難もあるが多くの出会いと助けがあり、本当にいいものを作ることができる」ということを伝え、妥協しない姿勢と人とのつながりの重要性を学生に示した。

最後には、「毎日の積み重ねが役に立つときがきっと来るので、あきらめずに夢を追いかけてほしい」というメッセージを受講生に伝えた。

《受講生の感想》

●私たちの知っているライブは2〜3時間だけでしたが、実際にはその2〜3時間のために1年以上も前から何百人もの人が力を合わせて１つのライブを作ろうと頑張っていたことがよく分かりました。そして、「直感」を大事にし、それを本当に実現してしまう亀田先生の行動力や人をひきつける力はすごいなと思いました。　立命館大学・文学部・3回生

●ものをつくるということと、売るということとに大きな差はないという言葉に、プロデュースは販売であり創作なんだということを感じました。「音楽力＝生でのパフォーマンス力」というのは、確かにそうだと納得しました。また、人とのつながりが一番必要なんだということを再認識しました。
立命館大学・産業社会学部・1回生

●ライブをプロデュースする＝誰に向けてどのような贈り物をするのかという言葉に感銘を受けました。これから私たちが企画などをする時にも通じるところがあるなぁと思いました。数々のアーティストさんにオファーをする際にも人間力を大事にしたということで、アーティストの実力だけでなく、人間性も大事にしているのだなと素晴らしく感じました。
立命館大学・産業社会学部・1回生

●「ピンときた瞬間にアクションを起こす」この言葉が胸に響きわたった。達成したいこと、目的、確実な何かがなくても、行動に移すことにより生まれるものがあるのだと学んだ。バランスを調整したり、オリジナル性を追求したりなど、一つの企画を完成させより良いものにする為には、努力が必要なのだと考えた。　立命館大学・産業社会学部・1回生

●本当の「人間力」「音楽力」を追求される中で、最高のプロデュースをされた過程に情熱やこだわり、音楽の“生”で感じるすばらしさを感じました。また、「人間力」を重視して集めたメンバーから、多くの意見をぶつけあう中でより良いものが生まれてくるLiveづくりは、本当に信頼関係の深さが“力”となっているのかと感じました。
同志社女子大学・学芸学部・4回生

●「人間力」を重視して人を集め、お金の事などで衝突しながらも当初の考えどおりに実現できたのは亀田先生だから、というのは確かに大きい（色んな意味で）。でも実現できるということは示されたので、厳しくなっているといわれる音楽業界で、他のアーティスト、ライブ自体、売り方なども変わってもっと素敵なものになっていくといいなと思った。
立命館大学・産業社会学部・3回生